

コラージュを用いた心と対話する建築 (空間主義から意味の建築へ)

連 健夫 建築研究室代表 連 健夫



■ 心と対話する建築づくり

建築への配慮として、機能的、耐久性、経済性などはもちろんのこと、心への配慮が大切と考えている。家づくりにおいても、1日の疲れが取れ、次の日の活力が生まれるような居住空間、つまり癒され元気になる家であることが望まれます。このためにはどうすればよいか。住み手の価値観、意識、考え方、様々なことを理解し、共有することによって始めて、住み手の心に届く建築になるのでなくろうか。一方通行的にデザインを押し付ける態度からは、心と対話する建築は生まれないと考える。

この意識の共有のためには住み手が何らかの形で設計や施工のプロセスに参加し、設計者とキャッチボールすることが望ましく、そのことによって真に愛着の持てる住まいになるのではないかと。つまり、クライアントとの十分なコミュニケーションの必要性である。その方法には色々あるが、私の場合は、コラージュ(切り貼り絵)を用いている。最初クライアントに「理想の住まい」をテーマにして、雑誌などから好きな写真やイメージを切り取り、自由に紙に貼り付ける絵、すなわちコラージュをつくってもらっている。それを基にした対話の中で、クライアントのこだわりや嗜好、価値観など様々なことが分かってくる。貼り方も、左右対称に貼る、律儀に整然と貼る、ランダムに貼る、用紙からはみ出して貼るなど様々で、クライアントの個性が出て面白く、コミュニケーションの中でコンセプトのようなものが生まれることもあり、また貼られたもののイメージや構成からヒントを得てデザインに結びつけることもある。つまり、設計のスタートはクライアントにあり、そのコミュニケーションの中で作品が生まれるという考え方である。この場合の建築家の役割は、クライアントの意識を具体的な建築空間に翻訳、変換する役割を担う。

(写真1)は中学生の娘さんと小学生の息子さんを持つ家族4人のコラージュである。全図関係に勤務されているご主人の

のは左右対称に整然と構成され、奥様のものは中心性がありダイナミックな構成、娘さんのものは木漏れ目がとてもきれいで、息子さんのものはスケッチを含む自由奔放なコラージュである。そこからデザインキーワードをいくつか出しながらディスカッションする。例えば「シメトリ、セピアカラ、樹木、木漏れ目、迷路性、中心性」などである。その対話の中で「成長する木」をコンセプトとし、その時点で設計に取り掛かる。形にする前に時間をかけるというまどろっこしいプロセスであるが、それが大切と思っている。(写真2、3)は完成住居で、中心性を螺旋階段に託し、各フロアがそれに取り付く空間構成とした。螺旋階段の上部にはトップライトを設け、木漏れ目を表現し、息子さんのベッドから小屋で階段に出られる動線に迷路性を与え、斜めから見た立面がシメトリ、外壁にはセピアカラを使うなど、その具現化がデザインなのである。コラージュのどの部分を手がかりに形にしていけるかはケースバイケースであるが、第一印象を大切にしている。例えば(写真4)はある夫婦のコラージュであるが、ご主人のコラージュに興味深い緑の四角い枠が2つある。それがとても印象的でそれをそのまま立面のデザインに用いた。そして奥さんのコラージュの目差しいっぱいのテーブルのイメージから、垂木の下に大きなテラスを設けた(写真5)。コラージュの構成が空間構成のヒントになったケースもある。ご主人のコラージュが、長方形の写真を下地に曲線の絵が上に貼られている構成が興味深く、1階にいくつかの長方形の空間を置き、2階に曲面屋根のリビングを乗せるという空間構成とした。そして奥様のコラージュの屋根とデッキのイメージに影響され、広いルーフトラスを設けた(写真6)。

このようにコラージュの読み取りと感じ方、その具現化は様々であるが、共通して言えるのは、住み手の満足感である。



(写真1) 家族4人のコラージュ。左上が奥様、右上がご主人、左下が娘さん、右下が息子さん作成、それぞれが個性적이다。



(写真2)「フリーハウス」成長する木というコンセプトや、シメトリやセピアカラなどのキーワードが活かされている。



(写真3) 螺旋階段の上部にトップライトを設け、木漏れ目を表現。

住み手自身が作ったコラージュと実際にできた家との関係が見えてくる中で、自分が見つけた家であるという充実感と満足感が得られるように感じる。また「家から元気を貰う」という話もよく聞く。クライアントの意識と建築空間とのキャッチボールが生活をやる中で自然に行われているのではないかと考えている。

■なぜコラージュなのか

A Aスクール(※1)に学生、教師として在籍していた時に、学生の作品表現の多くにコラージュが用いられており興味を持った。コラージュは図面のみならずスケッチや写真、コメント、様々な表現を受け入れる柔軟性と多様性を持っており、言葉だけでは言い表せないようなイメージやコンセプトを伝えることができる。A Aスクールでは設計課題の中で、ファイナルジュリー(最終講評会)のみならず、アドバイスを受ける中間ジュリーの機会が何度もある(写真7)。中間ジュリーでは、学生はプロジェクトの進捗状況を発表するため、図面はプロセスの表現であり、多様な内容を表現できるコラージュが適しているのである。したがって、多くの学生のポートフォリオ(作品集)はプロセスを集積したコラージュの集合体となる。また扱われている建築の意味自体が多様であり、建物のみならず、思想、物語、音楽、インスタレーション、料理など様々な領域を包括しており、その意味からも多様な表現を受け入れるコラージュが用いられている。

創造性を重視する教育の中で教師と学生のやり取りについても興味を持った。毎回の個人指導の中で教師がポジションを変えることによって、学生の視点が広がっていくという視問答のようなやり方が、臨床心理のカウンセラーとクライアントの関係に似ており、ユング心理学に興味を持つようになった。その探求の中で「デザインにおける建築と建築教育の創造性に関する研究」(※2)をまとめた。フロイトは意識の中に無意識が存在することを明らかにした。ユングはその無意識の中にあるものを意識化するものを創造力とし、その力を使って治療に役立てようとした。意識と無意識を繋げるものに「心象」があり、それを扱うことによって創造力を導き出そうとした。その方法としてユング派においてコラージュ療法、自由連想法、プレイセラピー、絵画療法など、様々な療法が発展してきた。いずれも心理テストとしての側面ではなく、クライアントとセラピストのやり取りの中で、創造力という自己治療力により治療が行わ

れることに特徴がある。その意味において、クライアントとセラピストの関係が創造性を扱う建築教育の中でコラージュを媒介にした教師と学生とのやり取りの関係、更には建築家とクライアントの関係の類似性に繋がるのである。コラージュ(Collage)は美術表現方法の1つであり、Collerという「のりで貼る」フランス語からきている。ピカソやブラックが始めた抽象化されたものに現実感を取り戻すというキュビズムのコラージュと、マックス・エルンストらの物語性のある表現やホックニーなど異質なものの併置を扱ったシュルレアリスムのコラージュがある。この意味でも建築が芸術を扱うもの、抽象と具象を扱うものとして、コラージュの表現に深みと面白さを感じる。特にコンセプトを大切にしている建築家、例えばピーター・クックやセドリック・プライス等に、コラージュの表現が多いのは興味深い(※3)。

その意味からも、前述のように心と対話する建築づくりにコラージュを用いているわけであるが、施主によっては、忙しくてコラージュをつくる時間がないというケースもある。この場合は自由連想法からヒントを得て、施主にある言葉から10の言葉を連想してもらい、それを手がかりに設計する場面もある。京都西陣のうどん屋の設計では、施主である4人に店名の「尾張屋」という言葉から10の言葉を連想してもらった。その中から印象的な言葉、共通する言葉などを読み解く中で、「お城、蔵、うどん、そば」などをデザインキーワードにして設計した(写真8)。住宅の改修の事例で、子供たちが「自分の家」という言葉から連想してもらい「光、曲線、赤い実、カーテン」などを手がかりに設計したケースもある。赤色の曲面壁と棚をテーマに上部から光を取り入れる工夫をした。事務所の設計でも用いることができる。外資系弁護士事務所の設計で、「事務所、仕事、日本、米国」の言葉から連想してもらおう中で、施主の仕事の忙しさを強く感じ、事務所環境に柔らかさと手作り感を与えたいとの思いで、左官仕上げの曲面壁をデザインした(写真9)。住宅や店舗、事務所などの他、学校施設の設計でもコラージュを用いることができる。日本建築専門学校新体育館設計では学生に理想の体育館をテーマにコラージュをつくってもらう中で木造のこだわりを感じ、鉄骨造の倉庫本を補強して開放校舎設計を行った。また現在設計中のルーテル学院大学の新校舎においてもコラージュを用いた学生ワークショップを行い、



(写真4) 下部で主人のコラージュの四角の枠が印象的。上部が実際の家の写真。この生活が感じられる。



(写真5) 「見通しの家」建物の外観に四角の枠を持つ。現しの重木の下に広いテラスを持つ。



(写真6) 「ルーフテラスのある家」コラージュをヒントに1階に矩形的空間、2階にルーフテラスを包む大きな曲面屋根をかける。



(写真7) AAスクールの中興発表会。多くの作品はコラージュによる表現である。(左の2番目からアラン・バルフォア学長、セドリック・プライス教授に筆者)



(写真8) 「尾張屋」の外観。施主の理想をヒントに城と城のイメージ、縦リブにうんととそぼのラインを表現。



(写真9) ヒューズ・ハバード＆リド法律事務所。施主の理想をヒントに左官仕上げの曲面壁で柔らかな雰囲気を与えた。

その示唆をデザインに活かそうとしている(写真10)。これ以外にも工夫すれば心のやり取りを意識した様々なやり方が、建物の種別に関わらず可能ではないかと考えている。

■意味の建築の視点

建築の評価において、機能主義、合理主義をベースにした近代建築では一義的な価値観でその質を評価することが可能であった。しかし多様化した現代建築の価値評価において、そのプロセスと建築との関係が大切になってくよう。つまりプロセスの中で生まれたコンセプトと評価軸において、デザインを評価しようという視点である。街づくりワークショップのプロセスの中で、参加者にとって大切なもの、意味あるものが共有され、その意味を具現化するためのデザインという視点である。施主にとって大切なもの、施主の多様な価値観が、従来の普遍性に重きを置いた価値評価に代わるものとして今後の建築にとって大切な視点ではなかろうか。このことは建築思潮を見る中で理解されよう。例えば60年代における概念を大出したコンセプトアリズム、70年代の物語性を大切にしたナラティブ建築、80年代の建築の常識をいったんはずして考えるという脱構築主義のデ・コンストラクティビズム、90年代の地域社会から建築を捉えるコミュニティアーキテクチャー(※4)などの建築思想がある。これらの思想はハードな空間構成に重きを置いた近代建築の発想ではなく、ソフトな建築の意味そのものを扱ったものとして捉えることができる。つまり、「空間主義」から「意味の建築」へとという流れである。このことはハードな建物を扱う工学的視点をベースにした日本では建築思潮としての議論が弱く、単にポストモダニズムというくくりで捉えられてきた。クライアントが設計に参加するというプロセスを大切にする意味において、まちづくりのワークショップも、コラージュを用いた心と対話する建築づくりも「意味の建築」であり、私にとっては同じカテゴリーである。つまり、心はもともと多様であり、それに応える多様な「意味の建築」があって当然なのである。

そこで2つの疑問が生じる。1つは「心をどのように扱うか」であるが、心を扱うには非因果関係の思考が大切であり、建物に具現化するという技術的な因果関係の思考とのキャッチボールとバランスが同時に求められると考える。一義的な考えに固執することなく、様々な価値観を受け止める柔軟な態度の必要性である。2つめは作家性への疑問で、「クライアントの価値観

から設計するのは建築家の作家性はなくなるのではないかと」の問いである。私は、この場合において建築家の個性はスタイルとしてではなく、その思想に基づく手法であり、変換する力であり、おのずと出てくる建築の味ではないかと考えている。つまり価値観や創造性においてクライアントと建築家が互いに影響しあう中で、「心と対話する建築」が生まれるのではないかと考えている。



(写真10) ルーテル学院大学新校舎設計学生ワークショップでのコラージュによる発表

■語句説明

- ※1 Architectural Association School of Architectureの略称。150年の歴史を持つ建築学校でロンドンにある。ユニットシステムの中でユニークな建築教育を行っていることも有名である。リチャード・ジョースやナイジェル・コフ、ザハ・ハディッドなど個性的・影響的な建築家を輩出してきた。
- ※2 A Study of Creativity in Architecture and Architectural Education in Design, A.A.大学院優等学位論文(AA Graduate Honours Diploma, Dissertation 1993/94)
- ※3 Peter Cook: アーキテグムの中心的建築家、アンビルの建築でも有名。現在ロンドン大学バレット校の学部長。Cedric Price: 作品としてはロンドン動物園大鳥籠が有名。2003年夏に死去。ニューヨークタイムズは「20世紀で最も偉大な建築思想家の死」と報じた。著者はAA在籍時に彼の助手を務めた。
- ※4 これ以外にも60年代にコンセプトアリズム、IAUS、アーキテグム、学生運動、70年代の詩的建築、コーポラティブ、80年代のインダストリアルバリエーション、90年代の社会派建築などの思想が目まぐるしく見られる。詳しくは「対話による建築まち育て」(学芸出版社)10章、建築思潮からみた意味の建築を参照していただきたい。

連 登 夫(むらじ たけお)

1956年東京都生まれ、東京理科大学大学院修了の後、林巴館設計事務所勤務。1996年に渡米、AAスクール留学。AA大学院優等学位取得の後、同校助教。東ロンドン大学非常勤講師。在米日本大谷建築技術研究所を務める。1996年に帰国し事務所設立。ルーテル学院大学、川崎市アカデミーでの講師。海外にワークショップを続けるなど教育にも関わっている。作品に「ブルームス」(竹のチャペル)、「つげいんの家」など。著書に「イギリス色の街」(朝倉書店)、「対話による建築まち育て」(共著:学芸出版社)、「活動する建築の調査マニュアル」(共著:中央法規)などがある。